

## 6.5 ローカルかつグローバルに



酒井 一夫

公益財団法人 放射線影響協会 理事長

環境科学技術研究所（環境研）に最初に伺った際に施設見学をさせて頂いた。低線量生物影響実験棟や閉鎖環境研究設備も印象的であったが、「全天候型人工気象実験施設」には度肝を抜かれた。雨や雪を降らせ、風を吹かせ、様々な気象現象を再現できる。この地方の特徴的な気象現象で、時として冷害をもたらすやませ（山背）も再現できる。やませを再現してその仕組みを探り、対策を検討するとのこと。設備自体もさることながら、地域特有の課題に取り組み、研究成果を地元に戻しようという研究方針に感銘を受けた。

環境の放射線防護を考えるにあたっては、放射性核種が環境中でどのように移動し、環境生物にどのような被ばくをもたらし、影響を及ぼすかを把握する必要がある。この流れの中で重要な役割を果たすのが地域に特徴的な「代表的生物種」である。代表的生物種は、地域の動植物の中から、放射線の影響を解析しやすいか、生態系の中で重要な位置にあるか、などとともに、地域の住民にとって馴染みがあるか、農林水産物として重要か、などがその要件になる。環境研では、調査研究の対象として、イネ、リンゴ、ナガイモ、ホタテなどを選定しているが、先の要件に照らして極めて適切であると言えよう。

筆者は2006年に国際放射線防護委員会（ICRP）の中で環境の防護を担当する第5専門委員会に加わった。ICRPでは、主委員会の下に、担当分野ごとに専門委員会が設置されている。ICRPの会合には、2年に一度、すべての専門委員会が一堂に会する「合同会合」と、それぞれの専門委員会が独自に開く「個別会合」がある。2016年は個別会合の年であったが、環境研の国際シンポジウムとタイアップして六ヶ所村と三沢で第5専門委員会の個別会合が実施された。第5専門委員会は、2017年をもってその使命を完遂したとの判断で「発展的に解散」したので、第5専門委員会としての最後の個別会合がわが国で開催されたことになる。環境研には改めて感謝いたしたい。

この個別会合でも、環境研のアプローチが話題となった。地元になじみのある生物種を対象に選んでいる点、研究成果を地元に戻す姿勢を明確にしている点などが、「環境防護研究のあるべき姿」として評価された。

一方で環境研からの報告が、それまでの欧米での報告と必ずしも一致しない点も話題となった。この分野の専門家によると、青森県の黒土の質は、世界的に見てユニークなものであるとのことであった。放射性核種の挙動は土の質によって大きな影響を受けるので、ここで得られた研究成果は世界的にユニークなものであるとのことであった。ローカルな題材を対象としつつ、グローバルな視野の中でユニークな研究が進められていることになる。

今後も、地元に着目したローカルな課題につき調査研究を行いつつ、その成果はグローバルな視野の中で議論して頂きたいと思う。